
男と女の立場が入れ代わった世界で

ヤーギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男と女の立場が入れ代わった世界で

【Nコード】

N80690

【作者名】

ヤーギ

【あらすじ】

男と女の立場が入れ代わった状況に突然陥った鷹谷と小林は、周りの変化に困惑しつつも、順応していく。しかし、今まで20年間育って来た環境による影響は大きく、当たり前だと思っていた何気ないことで周囲に波紋を広げることとなる。

第一話「事の始まり」

朝、目が覚めて目覚まし時計を見た。

7時25分

(…珍しくアラームの前に起きたな。)

アラームの5分前に起きた。ただ、それだけがいつもと異なる何でもない日の朝。

しかし、この朝はいつもとはまったく異なっていたのに鷹谷は気付かなかった。

気だるげに準備をして、朝食して食パンを2枚食べた。何も付けずに。

朝食は、昼食までに腹が鳴らないように出来れば十分、という鷹谷の持論からいつも

こんな感じだ。

大学まで、自転車でノロノロ行き(汗をかきたくないため)、授業開始10分前に教室

に着いた。授業開始までは、音楽を聴きながら、ボーっとしてようと思つて席に着いた

ところで声をかけられた。

「鷹谷、おはよう。今日なんか違いあるか？」

（珍しく早いな…。今日は雨か？）と、思いつつも顔には出さず、

「はよ。」

別に。……小林こそどうよ？」

と、眠さもあつて適当に返事をし、イヤホンを外し、MP3を力バンにしまった。

たかや りょう
鷹谷 涼と小林 こはやし せい 清は、共に大学3年で、クラスも同じなのでほとんど授業も一緒だ。

それで部活も一緒なもんだから、四六時中一緒にいると言っても過言ではない。

2人とも遅生まれで、浪人や留年もしていないのでちょうど20歳だ。

「何にも。お前には変化があるかと思って、早く来たのに。」

小林が、落胆した様子で言うのを聞きながら、小林が早く来た理由に納得しつつ、

鷹谷は昨日のことを思い出していた。

鷹谷と小林は、授業の1限と3限の中途半端な空き時間を学食で話をして、ぐだぐだ
過ごしていた。

「鷹谷、聞いてくれよ。オレ、昨日部活の帰りにテーピング買った
こうと思って、買いに

行った帰りに面白いもん拾ったんだ。」
そう言って小林が見せてきたものは、七夕の時に願いを書く短冊のようだった。

（今が9月なことを考えると、何で落ちてたんだ？）と、鷹谷が考えていると、

「これ面白くてさ、裏に面白いこと書けって書いてあるんだ。」

確かに見てみると、あなたはとうなったら面白いと思いますかと、達筆な字で書かれていた。

そして、裏面は白紙である。

「それで不思議なのが、ボールペンやマジックでお笑い芸人のギャグとか書くといつの間

にか消えてるんだよね。何か面白くないって言われてるみたいで、オレより頭のいい

鷹谷に面白いこと書いてもらおうと思って。」

と、小林は笑って言う。

「……面白いこと考えるより、何で消えるのか考えて、分からなければ研究所とかに、

すごい素材があるって言えば高く売れそうじゃね？」

「そうか？でも、消しゴムで消えるボールペンとかだってあるんだから、いつの間にか字

が消える紙があっても不思議じゃないっしょ？」

鷹谷は、その時は深く考えず、その理論で納得してしまった。後

々、鷹谷はこのことを後悔することになるが、情報が少なすぎた。この時、鷹谷はこの後のことを回避する
すべはなかった。

「まあ、そうか。じゃあ、オレが消えないような面白いことを書いてやるよ。」

鷹谷は、ちよつとノリで偉そうに答えてから、思考を巡らせた。
(どうなつたらねえ……。面白い状況ってことか？

……条件が無さ過ぎて、何も書けないな……。試しに適当に書くか。

)

鷹谷は、さらつとシャーペンで もし、この世界で男と女の立場が昔から逆だったらと、書いた。

その時、どこからともなく、

『悪くないな。じゃあ、明日からな。』

という女性の透き通った、そして楽しそうな声が聞こえ、突風が2人の前を通った。

突然の突風に驚き、2人は目を閉じた後、辺りを見回すと、他の人たちは何事もなかったかのように過ごしていて、机に目を戻すと短冊が無くなっていた。

2人は、お互いに驚いた顔を突き合わせ、一言も発する前にすぐに短冊を探して回ったが、結局見つからなかった。小林なんか、机の下に潜り込んで探

して、女の子から遠目
に白い目で見られていた。

お互い、軽くパニックだったが、
「とりあえず、明日を待つしかないか。」
と、鷹谷が言ったのをきっかけに、授業、部活と普段の生活に戻
った。

「そつえば、短冊の件があつたな。」

「鷹谷、おまえ忘れてたのか？オレなんか気になって寝付けなかつ
たぞ。」

「というか、ほとんど寝てない！5時以降の記憶がないから、パソ
コン付けっぱで仮眠
取ったんだろうけど。」

小林はある意味、大学生らしく大した理由なしに不規則な生活を
送っている。

「おまえの場合、いつもどおりだろ？」

「まあな。でも、気になってたのは本当だ。オレが拾ったんだしな。
しかし、確かめようにも、女子の少ない工学部の授業じゃ分から
んな。」

これと言って、仲のいい奴もいないし。鷹谷、どうす……教授来
たから終わった後で

話そうぜ。」

鷹谷は、小林に相槌を打って、板書をとる準備を始めた。しかし、頭の中では、

（確かめるには、ネットをいろいろ見ると…部活の女子と話してみるか）

と、この後の算段を立てていた。

しかし、この日は夕方まで授業があり、ようやく終わったと思うと部活まであと2時間
を切っていた。

「いつもだと、2時間もあると思ってたけど、したいことがあると2時間しかだな。」

「確かに。」

小林の（めずらしく）もっともな意見に同意しつつ、2人は鷹谷の家ですぐさま

パソコンを起動し、それから荷物を置いて一息ついた。

「相変わらず、鷹谷の部屋はキレイだな。」

小林が感心したように言う。

「おまえんちに比べれば、大概是キレイだろ？」

小林の部屋はゴミ屋敷とまでは言わないが、一人暮らししてます！という感じの部屋だ。

小林は聞こえなかった振りをして、鷹谷に聞く。

「何から調べる？考えてあるんだろ？」

「…気になって眠れなかったはずなのに、おまえは何も考えてないのか？」

「そっというのは、お前の仕事だろ？で、何？」

「……歴代の総理大臣」

鷹谷は呆れつつ答えた。

男女の立場が代わることで、昔からと短冊に入れたことを考えると、無難だと思っ

たのだ。鷹谷が、次に何を調べようかと考えてたことをまとめると、

「鷹谷！これ見ろって。早く！」

と、小林が大声をあげた。

鷹谷は思考を中断し、小林の反応から、
(…まさかな)と思いつつ、画面を見る。

「全員、女の名前だ…。」

小林の茫然とした声を聞きつつ、鷹谷も自分の目が信じられなかった。

年号と名前の下に、簡単に総理大臣がしたことと当時の評判などが書いてあった。

それを見る限り、理系な鷹谷には自信がなかったが、おそらく昨日までの歴史と違いは

なかった。少なくとも、高校受験を推薦入試で合格した鷹谷は、

その当時の時事には
自信があり、間違いはなかった。

「…次は、引越の求人情報を探してくれ。無かったら、工事現場で
もいい。」

鷹谷は動揺しつつも、小林に指示を出した。

「ああ。……あったけど、これで何がわかるんだ？意味が分からん
ぞ。」

小林は結構パニックらしく、自分で考えることを放棄したようで、
すぐに答えを求めて
くる。

「立場が代わるというのが、どこまでかなと思ってな。

総理大臣と同じような法則なら、男性が大半を占める引越しの
ような仕事は、今は

女性が大半を占めているはずだからな。しかし、写真を見る限り
そんなことはないよ

うだな。…昨日までとは、だいぶ違うようだが。」

「なるほどね。…しかし、男女比率6：4か。本当に違うな。」

「いや、男女比率なら4：6だ。女性：男性で書いてあるからな。

加えて、リーダーはだ

いたい女性のようだな。」

「げっ、本当だ。…っていうか、求人の文面もひどいな。男に重い
物持たせて、女は楽に

稼ごうみたいな。」

「……もう少し調べてみないと確信は出来ないが、女性が男性のよ
うにバリバリ働いてる
けど、筋肉のつき方の差などは前と同じっばいな。…中身だけが
代わったのか？」

鷹谷は自問自答しつつ、小林をどかして、自分でネットで調べ始
めた。

（小林が不満げな目で鷹谷を見たが、軽く無視した）

鷹谷がいろいろ調べた結果、会社の社長は圧倒的に女性が多いこ
と、家事・育児をする

男性が多いこと、女性は、子供を産んですぐ仕事に戻ってしまう
ことなどが分かった。

新事実により2人で驚きながら調べていると、いつの間にか部活にほ
ぼ遅刻確定な時間にな

っていて、超特急で部活の準備をするはめになった。

第二話「部活にて」

鷹谷は自分の家だったのもあり、普段はしない自転車を全力でこぐことで、なんとか部

活に間に合った。

鷹谷と小林は共にバドミントン部に属していて、4年生が夏に引退した今、鷹谷が主将を務めていて、小林も（意外にも）エースであるため、2人は部の中心人物であった。

小林がまだ来ていないことを確認しつつ、体育館の中に入っていると、

「ちよつと、ギリギリすぎるんじゃない？」

鷹谷は、女子主将の新堂^{しんどう}恵里^{えり}に声をかけられた。

「ごめん。次から気をつけるよ。」

鷹谷は焦っていたのもあって、無難な返事をしたが、言われた言葉をよくよく思い出し

てひどく驚いた。

一般的に考えれば、同学年である新堂に注意されることは至って普通のことであるが、

昨日までの新堂であれば、あり得ないと言ってもいい。

新堂は、別に女子の中で特別内気なわけでもないし、男子主将である鷹谷がギリギリに

部活に現れることに不満を感じてもおかしくない。

しかし、この部活は男子主将と女子主将がいるとは言え、男子と女子は同じ時間に同じ

場所で練習していて、かつ、男女比率も男子の方が7割近くを占め、男子中心で練習が

進むため、男子主将が全体の主将といった感じになる。

そのせいもあって、男子主将には、なかなか注意など出来ず、新堂も例にもれず、不満

に思うことがあってもすぐに直接、鷹谷に言うようなことは今までなかった。

言うとしても、飲み会などでそれとなく伝える程度だ。

鷹谷が驚きながら、いろいろ考え事をしつつ、ノロノロ準備をしていると、

「集合！…男子、さっさと集合して！」

と、新堂の大きな声が響いた。

もしかしたらと思っていたが、女子主将の新堂が全体の練習をしきるらしい。他の部員

も、それが当たり前といった様子で指示に従っている。

（小林は大丈夫だろうか？まだ状況を把握していない状態で遅刻なんて。

あいつ、ちょっと頭弱いしパニックになりそうだな…。）

鷹谷としては、新堂が指揮をとってくれることに異論はないらしく、それよりも小林が

遅れてきて、新堂が部活を指揮している状況にパニックを起こすことを心配していた。

鷹谷としても、新堂の性格の変化などに困惑しているが、授業中の時間を使っている

な状況を想定してあったので、まだ余裕がある。

ある程度想定はしていても、実際に身近な人に変化が現れること

で少なからずショックを受けてはいるが。

そして、練習が開始して30分がたったころ…

「すいません！遅れました。」

大きな声で頭を下げつつ、小林が体育館に入ってきた。

「何していたの？男子のエースがそんなんじゃないじゃない。周りに示しがつかないじゃない。」

新堂が呆れた感じで、声をかけた。

「宿題をしてたら、いつの間にか時間がたってて…」

小林は新堂に呆れた口調で話しかけられたことに驚いていたが、遅刻した時の言い訳

一つを答えた。

昨日までの新堂なら、嘘だと分かっているでもそれで納得しただろうが、今日は違った。

「そんな訳ないでしょう？どうせ、寝坊かゲームでしょ？」

腕立て、腹筋、背筋をそれぞれ100回やってから全体練習に混ざりなさい。」

この返答に小林はひどく驚いた。

「100回!？」

まあ、100回くらい大丈夫だけど…。

おまえがしきってるのか？鷹谷は来てないのか？何で、おまえがオレの練習を決めるんだ？」

疑問を連発した。

「涼？来てるわよ。」

それより、私が指示を出すのは当たり前じゃない。

確かに涼は男子の主将だけど、全体をしきるのは私の仕事なんだから。

「寝ぼけてるの？」

新堂は可哀想な子を見るような目で小林を見た。

「涼！？」

おまえ、昨日までそんな風に鷹谷のこと呼んでなかっただろ？」

「本当に頭いかれた？」

鷹谷くんなんて呼んでたの1年の最初だけじゃない。

筋トレしたくないからって、変なことばかり言わないで。」

新堂は、怒った口調で小林に答えた。

（そろそろヤバいな……。救出しよう。）

「変なこと言ってるのはどっちだよ！」

「だいたい何で新堂がしき……」

「新堂！小林が勉強してたのは嘘じゃないんだ。」

結構大変な宿題で、オレも部活ギリギリまでかかったんだ。

まあ、遅刻は悪いことだけど、大学生の本分は勉強だろ？」

筋トレを半分にしてやってくれないか？」

そしたら、小林も静かになるからさ。」

小林はまだ何か言いたそうだったが、アイコンタクトで黙るよう
に伝えた。

小林は息をのみこんだ後、大きく息を吐きだした。

新堂はすごく驚いたように鷹谷の方を見て、

「まあ、涼がそう言うならいいけど…。」

涼がそんなに時間のかかる宿題ってなんだったの？…って、これは部活の後で話すべきね。後で教えてね。」

新堂はニコツと可愛く笑って、練習に戻っていった。

「どうなっただよ！？」

小林が切羽詰まった感じで聞いてくる。

「…後でゆっくり話そう。オレもまだ、まとまってないんだ。」

小林は、すぐにでも聞きたいいらしかったが、鷹谷が言つつもりがなさそうなのを見て、

「…分かった。それまで、オレはどうすればいい？」

「おとなしくしてろ。」

小林は、少し間をおいてから頷いて、シューズを履くなどの準備を始めた。

（小林は結構きてるな…。まあ、部活が終わるまでなんとか持ち堪えて貰うしかないな。

それよりも、オレが仲裁に入った時に、新堂がやけに驚いてたのが気になるな…。

男女の立場が入れ代わっても、仲いい奴の援護するのは普通じゃないのか？

ましてや、オレは男子の主将なんだし。可能性としては……）

鷹谷が考え事に没頭してると、

「涼先輩！先輩の練習の番ですよ！」

1つ年下で、2年生の相川^{あいかわ} 優衣^{ゆい}が声をかけてきた。

「ああ、悪い。」

相川は何セット終わった？」

「3セット全部終わりましたよ。」

それより、いつもみたいに下の名前で呼んで下さいよ。
名字の呼び捨てって、何か、威圧的で好きじゃないって言ったじゃないですか。」

ニコニコしながら、相川が言ってきた。

「……分かった。優衣、でいいのかな？」

鷹谷はいつもどう呼んだのか分からず、聞いてみた。

相川は、すごく驚いて、一瞬言葉を失ってから、
「いいです！全然大丈夫です。オールオッケーです。決定ですよ？」
と、矢継ぎ早に答えた。

「……ああ。練習してくる。」

（何か、明らかに間違えたな……。くそつ、意味不明だ。小林ほどじゃないけど、このいつもと似ているけど異なる状況ってのは精神的にくるな……。）

鷹谷は、困惑しつつも顔には出さず、シャトルにこの気持ちをぶつけようとコートに

入っていった。

「相川、何を大声で騒いでたの？」

新堂が相川の声を聞いて、相川に話しかけた。

「ちょっと、いや、すごくいいことがあって、テンションあがってしまいました。」

試しに言ってみるもんですね。」

「…どういうこと？」

新堂は嫌そうな顔をしつつ聞いた。

「主将も涼先輩とあたしが話してるのを見て、警戒してたんでしょうけど、

あたしはあの短時間で、涼先輩に名前で呼ばせることに成功しました！」

「うそよ！同学年の私だって、名字なのに…。
何て言ったの！？教えなさい！」

「いやです。これは、先輩の命令でも聞けません。
…あつ、練習あたしの番だ。失礼します」

相川はニコニコしながら、適当に嘘をついてその場を去った。

（どういうこと？何で、いきなりそんなことに？

涼は、同学年と後輩は名字の呼び捨てか、同じ名字がいれば名前にちゃんづけじゃ

なかったの…？

私だって、名前で呼んで欲しくて、それとなくアプローチしてたのに…。

何で、何で、何で…)

新堂の心の中は練習メニューどころではなくなった。

「新堂、練習みんな終わったみたいだぞ？」

鷹谷が新堂に声をかけた。

「……涼だって、主将なんだから練習メニュー考えなさいよね！」

鷹谷はいきなりの八つ当たりには驚いたが、

(…本当は昔から新堂は心の中はこんな感じだったのか？

立場が代わって表に出してるのか?)と、見当違いなことを考えつつ、

(小林に多少ストレス解消してやるか。)

「…分かった。じゃあ、スマッシュの練習をノックで。」

男子はスピードとコース、女子は角度とコースを特に意識して。

余裕のある奴は、タイミングずらしたりしてな。

見本は小林頼む。みんなよく見ろよ。」

昨日までは、鷹谷がしきっていたので、メニューを考えるのはどうってことないが、

鷹谷が指示を出した途端、女子は新堂の我儘にドンマイって感じの反応だったが、

男子は驚きを顔に表した。

（まただ…。なぜ、驚くんだ？）

鷹谷はどうしても周りの反応が理解できず、それを振り切るように大きな声で、

「小林いくぞ、しっかり見本になれよ！」

と、声をかけ、ノックを出した。

ズバーン

いい音が体育館に響いた。鷹谷が気持ちよく打たせるために甘めにノックしてるのもあるが、小林のスマッシュは精度よくライン際に高速で叩き込まれる。

最後は高い身体能力を活かしたジャンピングスマッシュで、バレーのスパイクのような

感じで、スピード、コース、角度の3拍子揃ったスマッシュを決め、小林はすっきりした

顔でコートを出た。

これに対して、他の部員はおおくと、感心した素振りを見せ、鷹谷としてもようやく

予想通りの反応が返ってきて安心した。

ふと、新堂を見るとぼーっとしているので、

「大丈夫か？」

と、声をかけると、

「えっ??あつ…全然大丈夫！ちよつと疲れただけ。」

と、言っただけで顔を背けた。

しかし、鷹谷はその頬が少し赤く染まっているのを見過ごさなか

った。

(…新堂って、小林のことが好きだったのか？あんまり性格的に合わない気がするが…。

後で、小林に直接聞いてみよう。)

鷹谷の頭の中はどんどん迷宮入りしているが、ようやく練習時間が残り少なくなってきた、

鷹谷はなんとかかなりそうだと、ほっとしていた。

第三話「小林撃沈」

予定通りに事はなかなか進まないものである。

練習が終わるとすぐに、鷹谷と小林はアイコンタクトをして帰る準備を始めた。

鷹谷としては、もう少し情報収集したいところだったが、精神的疲労もあつたし、

なにより、小林が、とりあえずこの訳分らない状況から抜け出したい様子だったので、帰宅を決めた。

「きょ、今日何で30分も遅刻したの？」

同学年の今村^{いまむら とうま} 透馬が話しかけてきた。

今村は、浪人で、かつ、もう誕生日が来たので22歳である。しかし、童顔なため鷹谷

たちよりも年下に見られることも多い。

浪人して、かつ、やつとのことでのこの大学に入る程度なので、頭は小林と同等かそれ

以上に弱い。清^{せい}のことを、きよ と呼んでいるのも、最初に間違えて、

その後、無理やりあだ名にしたためである。

しかし、浪人した理由がバドミントンに熱中しすぎたためであるだけあって、バドは

上手い。小林と違って、背が低いのもあって、身体能力の差から小林には一歩及ばず

と言った感じだが。

小林が勉強していて遅れたとは微塵も思っていないらしい。

「…ちよつとな。いつの間にか時間がたってたんだ。」

小林は、少し余裕を取り戻したらしく、嘘を言わずに無難に答えた。

「ふん、まあ、いいけど。」

それより、きよもりーも今日はどうしたの？何かちよくちよく大声出してたし。

きよは女子主将に言い返すし、りーも自分でしきるなんて。」

小林は、答えようとして言葉を飲み込んだ。何かマズイことを言ってしまうと思ったのだ。

「小林は遅刻してパニックだったんだよ。それだけさ。」

それより、オレがきつたのは何か問題だったか？主将なんだし、当然だろ？」

鷹谷は素直に聞いてみた。

「ええ、えりーだって本気でりーりにしきれらせるつもりはなかったと思うよ。」

そついうのは、女子の仕事じゃん。

それに、大声で指示出すのって…何かやじゃない？」

今村は不思議そうに答えた。

「とーまだってオレらと遊んでる時は大声出すだろ？」

「それとこれとはべつ」。
みんなの前でとか、特に女子の前ではちょっと…。」
今村は言葉を濁した。

（なるほどね。ようやく、少し分かった気がする。

男子が人前で大声を出すのは良くないわけね。

大声を出せても出さないのが普通なわけだ。…部活では、何もしなくてよさそうだな。

確かに、今まで女子は指示に従うだけで、何かすることはなかったな。

しかし、これは、立場の変化とは違うのか…？）

鷹谷は思考を巡らせつつ、今村に答えた。

「今日は主将としての義務感にちよつと目覚めて頑張ってみたんだ。でも、オレにはやっぱしんどいから、次からまた新堂に任せることにするよ。」

「そんなことない！すごい良かったよ！とつさに考えたとは思えない。」

私より絶対才能ある。それに、……かつこよかったよ」

いつの間にか傍にいた新堂が話に加わった。最後の部分は聞き取れなかったが。

「うん、僕もよかったと思うよ。

まあ、しきるのはえりーの方がいいと思うけど。体裁的なこともあるし…。」

と、今村も新堂に同意した。

「まあ…そうだね。でも、メニューについてとか今度から聞いても

いいかな？

出来ればこの後からでも…別の場所で。」

新堂が緊張した感じで聞いてくる。

「うーん、悪いけど、また今度な。この後は、小林の宿題見なきゃいけないんだ。」

少し疑問が解けたことに満足した鷹谷は、小林を理由に帰宅を選択した。

「そつかあゝ。まあ、涼が苦勞する宿題なら、清はまだ終わってないよね。」

「……じゃあ、お疲れ……。」

新堂はすごく落胆して、去っていった。

「オレをだしに断るなよ。」

鷹谷は、新堂ダメなのか？」

今まで、黙っていた小林が急に話しかけてきた。

「ダメ？いや、別に全然。」

おまえに説明しようと思ったのもあるし、

…おまえのスマッシュ見て、新堂、頼染めてたぞ。

いくら練習メニューを考えるって言ったって2人きりは良くない
と思ってな。」

鷹谷は答えた。

「……おまえって鈍感だったんだな。頭いくせに。」

オレも昨日までは気付いてなかったが、昨日までと今日は全然違うのに……。」

「オレの推察のどこが間違ってたんだよ。

類染めて、ボーっとしてたら、見とれてるってことで間違いないだろ？」

鷹谷は、自分の考えが否定されて少しムキになって答えた。

「……それは間違ってたないが…。

新堂、カワイそ…。」

小林は新堂に心の中で手を合わせた。

そして、これ以上の話は無駄だと判断し、

「とりあえず、帰ろうぜ。頭がパンク寸前だ。」
と、鷹谷に帰宅を促した。

再び、鷹谷宅。

「小林、シャワー先に浴びてろよ。オレはもう少しネットで調べたい。」

「ん、分かった。じゃあ、遠慮なく先に使わせてもらっわ。」

鷹谷は、正直なところネットで調べるのは、部活前に大体終わっていたので、

考えをまとめて、小林に上手く伝えるための時間だった。

（あいつ、ショック受けるかもな…）

鷹谷としては、遅かれ早かれ伝えることとはいえ、今伝えることが正しい判断かは自信がなかった。

しかし、遅くなって問題を起こすよりはパニックになる方がマシだと考えたのだ。

「お先。」

10分くらいで小林がシャワーを終えて出てきた。
人の家では長風呂したりしないのは、小林なりの気遣いなのだ。

「ああ。そこに座れよ。」

鷹谷は、クッションを指差した。

「おまえはシャワー浴びないのか？」

「後でいい。そんな汗かいてないし。」

「話を始めてもいいか？」

「頼む。」

「当然、おまえも昨日の短冊の効果が実際に現れて、オレとおまえ以外の人に変化が表れているのは気付いているよな？」

「もちろん。オレだって少しは考えて、他の奴に昨日までと違いがあってもおかしくない

と、言い聞かせていたし、余計なことを言わないようにしてた。
立場が代わるっただけあって、昨日までだったら男がやっているようなことも、女が

やっているようだ。でも、それも絶対ではないっばいが、そうするのがいっていう

「暗黙の了解があるみたいだな。」

「その通り。」

問題なのは、どこまで代わったのかってことと、その暗黙の了解ってやつだ。

完全に代わったのなら、女性が男性のように筋肉がついてて、引つ越しも9割女性でない

とおかしい。

しかし、そんなことはない。代わったのは、意識や感覚の違いみたいだな。

男だったらこうするのが当然、みたいな考えが逆になってる。

でも、身体的な影響によって差が出るようなところはその限りではない。

これが、オレも推測がつかなくて困っているところだ。

そして、暗黙の了解にも困ってる。染みついた考えだから、自分でも気づきにくいし、

誰も教えてくれない。

それが普通だろ？って言われてしまう。ここまでは、分かるよな？」

「分かる。」

しかし、具体的にオレはどうすればいいんだ？

何に気をつければよくて、何に困ることになるんだ？」

「難しいかもしれないけど…」

普段の生活で和を乱したくないなら、女子に対しては、昨日まで女子がオレらにしてき

たように対応すればいい。

多少違っても個性で済むだろうけど、何気なく行動するとびっくりされて注目を浴びる

と思う。女子が近くにいるときは常に注意が必要だ。

逆に男子だけの時は普通でいい。それも許されないと精神的に参るだろし。

ただ、今までと違って、変に意気地がないとか、度胸がないと感じる場面があるだろう

けど、それを怒ってはダメ。

それを否定すると少数派に属するしかなくなると思う。」

「…しんどいな。オレはおまえみたいに、話す前に、一瞬で内容を吟味するとかいう芸当

は出来ないぞ。

慣れるまでは、たまにしか女子と関わらないようにするか…。」

小林は、これからを想像してげんなりとしたようだ。

「こっちはまだ慣れればなんとかなると思う。

問題は、困ることだね。オレたちは上辺だけならまだしも、根本から女性と立場を代わ

るのは難しい。

それこそ、今まで正しいと思ってきたものが片っ端から全否定だからね。

そして、今の女性は、昨日までの女性のような男性を求めるだろう。

……まあ、分かったかもしれないけど、彼女を作るのはしんどいかもしれない…。

たとえば、家事ひとつ取ってみても、男性は掃除や料理が出来て当たり前で、

もちろん、出来なくてもいいって女性もいるだろうけど、少数派だろうし…。

要は、オレらが無意識に女性に今まで求めてたものを求められるのさ。

…全然、条件に一致しないだろ？お互い…。」

小林はすぐくシヨックを受けた顔をした。3年間一緒だが今までで一番だろう。

「マジか…！」

ってことは、オレの部屋を見たら確実にドンビキして、オレの料理とか…

目玉焼きしか作れないぞ！？」

「自分の部屋が汚いつていう自覚はあったんだね…。」

というか、それは今まででもどうかと思うけど…。」

小林は鷹谷の言葉などあまり耳に入っていない様子で、

「おまえはいいよ！掃除できるし、料理できるし、頭いいし…」

つか、部内だけでもハーレム作れそうじゃねーかよ！

オレなんか…一生彼女出来ないこと確定じゃねーか！」

小林は泣き崩れた。

……本当に涙目…というか、基本的にポジティブシンキングな小林がここまでシヨック

を受けるの始めて見た。2年の時、大会前にテストがあつて、単位を落としてしまった時

もここまでではなかったような…。

「まだ、そうと決まったわけじゃ…って聞こえてないね。」

鷹谷は、昨日満月であつたろう、ほとんど真ん丸な月を見て、大
きくため息をついた。

第四話「ようやく1日目終了」

10分ほどたったが、いまだに小林が復活しないため、鷹谷は動画サイトでバドミントンのプロの試合を見始めた。

「おつ、これを取るのか…」

「……スロー再生でもスイングが見えないとか、反則だろ。」

「「おゝ、すげー!!!」」

「んっ？小林、復活したのか？」

「ショックを受けすぎて、何にショックを受けたのかよく分からなくなっただ。」

自分の想像以上の返答に鷹谷はすっかり呆れ変えって、

「まだ、話は終わってなかったんだぞ。」

元気になったのはいいが、メインの話がまだだ。」

「メインって…。彼女の出来ないこと以上に困ることがあるのかよ？」

小林は心底聞きたくないといった感じで聞いた。

「彼女の話は解決策がなくもない。
まず、」

「解決策！？そんなもんあるのかよ！

実は鷹谷が女の子をイチコロで落とす秘技を持つてるとかか！？」

鷹谷はげんなりしながら、

「秘技なんてあるわけないだろ…」。

まず、昨日から今日にかけていきなり立場が代わったわけだけど、昨日も今日も生きている人は、中身は代わっているけど、それ以外は代わってないのに

気づいたか？」

「…それ以外ってなんだ？外見か？

外見が変わらないのは当然だろ。立場に関係ないし。」

小林は、鷹谷は実はバカだったのか？という目で見ながら言った。

鷹谷は、小林の視線に気づいて若干苛立ちながら言った。

「そうじゃない。経験とかそういう話だ。」

「…意味が分かん。」

小林は、暗に早く教えろと軽く逆ギレしている。

鷹谷は、深くため息をついてから説明を始めた。

「おまえは気付かなかったかもしれないけど、オレは主将だから普段から部員のプレーを

よく見てる。

今日は、確かに中身が代わったことによって、多くの部員でプレーに多少の変化が出ていた。

今までピンチな状態では100パーセント守備に徹していた女子が、今日は時たま一か

八かでカウンターを狙いにいつていた。しかし、その女子はヤマ

が当たってもシャトル

が思ったところに飛んでいかないので首をかしげていた。これはさすがに分かるよな？

エース。」

「普段打たないショットは予想通りのところに来て、上手く返せないってことだよな。

反復練習をしてないショットは微調整が効かないからな。

しかし、鷹谷は主将の権限で女子をジロジロ見てるのか。むっつりす

「と、いうことはだ。昨日まではそのショットを打ってなかった。つまり、ここはパラレルワールドなんかじゃなく、昨日までオレらがいた世界が急に

代わっただけと推測できる。

パラレルワールドなら微調整が効かない理由がない。」

「ただ、調子が悪かったとか。オレもよくあるよ。」

小林がだんだん調子に乗ってきた。

「おまえは例外だ。調子が良ければ、初めて打つショットですら調整できるくせに。

それに、その子は他のショットはよく打てたし、調子は悪そうではなかった。」

「よく見てるな。誰のこと？新堂？」

「そこはいいだろ！それよりも、経験が残っているなら女子が料理の経験が残っている

可能性が高い。

だから、男性に料理などの家事を求めない可能性も十分にある。

さらにだ、こっちの方が大きな要因だが、工学部のオレらは普段から女性に接する機会

は少なかった。

しかし、男性とだったらいろんなやつ接してきたろ？」

「オタクとか？アル中とか？部活バカとか？」

「まあ…そんなとこだ。

だから、女心は分からなくても、男心なら分かるだろ？要は自分がして欲しかったこと

をしてあげればいいと思うんだ。積極的に話しかけるとか、気軽に飲みに誘うとか…

かな？」

「確かに！それは使えるかもしれない。

えっ…もしかしたら、オレ、ハーレムが作れるのか？夢の？うおー！！！！」

小林は男泣きを始めた。

「いや、だから家事が出来ないのは良くてプラスマイナス0で、基本マイナスだから…

って、また聞いてないよ。」

鷹谷は、ここが小林の部屋ならこの間に帰宅しただろうな、と思った。

その前に、小林の部屋に足の踏み場があるのか疑問だが。

「そっいえば、メインってなんだ？」

もう、ハーレムで頭がいっぱいな小林はふと思い出して聞いた。

「…もしかしたら、世界を変えた奴がまた気まぐれで世界を元に戻すかもしれないって

こと。正直ね、そうなった後のことを考えるとむやみに行動するべきじゃないのかな、

とも思う。」

「戻ったら万々歳だろ？」

ああ！ハーレムの心配か！確かに解散は困るな…」

小林は本気で心配し始めた。

「その問題じゃない…」。

オレら大学3年だろ？大学院には行くとしても、就職も近い。

今の立場で就職すると、戻った時に好まない職場についてる可能性もある。

株の値動きだって、絶対に変わってくる。

まあ、まだ情報不足で何とも言えないが、確かに戻るならさっさと戻って欲しいところ

だな…。」

小林はポカーンとしていた。

鷹谷は、小林が就職などまったく考えていないことを悟った。

そして、近い将来その面倒を自分がみるであろうことを考えて、心の中で泣いた。

「そんなん、そうなたら考えればいいじゃん！」

何より就職出来ればどんな職業でもオールオツケーさ！」

小林は親指を立て、白い歯を見せて笑った。

「……まあ、そうだな。」

どうせ、いつ戻るかなんて分かんないんだしな。」

鷹谷は自分が一人悩んでいることがすごくバカらしくなった。

（どうせ、少なくとも大学に入ってから大学3年の今まで、彼女のいないオレらには、

どっちの世界でも大した違いはないか…

っていうか、彼女の件は、もともとオレはそんなに問題視してなかったのに…。

小林に影響されてるなあ。）

「一緒にハーレム目指して頑張ろうぜ！」

「一人で頑張ってくれ…」

「そういえば、部活の話に出てきた女子って誰だ？」

教えないんだったら、一緒にハーレム目指そうぜ！」

「何でそうなるんだよ…」

そうして、夜は更けていくのであった。

第五話「合コンがしたい！」

鷹谷は小林に状況を説明してあげた昨日の夜、予想外に小林に元気を貰った。

なんとかなる気になった。

しかし、鷹谷の状況の推測は正しいかもしれないが、現実はそうやさしくないのだから…
ある…

「今まで、女っ気のない工学部の授業なんて退屈そのものだったけど、

今は…ちょっとホッとしてしまう自分がいる…」

小林は、自分に自分で幻滅した様子で、何とも返答しづらいことを言ってくる。

「…まあ、これから部活だからボロが出ないか、心配なんだろうけど…」

なんとかなるって！

オレも昨日から、またいろいろ考えたけど、おまえはもともと場の雰囲気とか気にする

タイプじゃないじゃん。本当にヤバくなったらフォローに入ってるから、思った通りに行動しろよ。個性ってことでみんな認めてくれるさ！」

鷹谷は、自分にもなんとかなると言い聞かせる意味も込めて、明るく小林を励ました。

「なんか、バカにされた気もしくもないけど、おまえのフォロー

は本当に期待して
るわ。」

「…それに、ハーレム作るんだろ？」

鷹谷は元気づけるつもりで、軽い気持ちで言ったのだが…

「部活でハーレム作れとか、どんだけ難易度高いんだよ…。
人数少ないし、競争率高いし、売却済みも多いし…。
自分は余裕だからって…」

小林は、ボソボソ恨み言を並べながらテンションを下げていく。

鷹谷は、予想外の反応に焦って失言をしてしまう。

「ほらっ、オレも協力す…」

「合コンを開いてくれ。出来る限り早く。」

とりあえずツテが欲しい。」

……さっきの言葉取り消してもいいですか？」

いきなり、小林のテンションが上がっていく。周りを気にせず、
踊り始めた。

「少しずつこの状況に慣れていくべきなのに、いきなり合コンはレ
ベル高くないか？」

小林は踊っている。

「オレが誘っても誰も来ないと思うよ…」

小林は踊っている。

「…男女比は揃えるの？」

小林は踊るのをやめた。

「同じか、もしくは女子多めで。」

いや、鷹谷信者の存在を考えると女子の方が多くないと困るのか？
…質も重視しつつ、数を打つ感じでいこう。」

小林は真面目な顔で無茶を言う。

「…鷹谷信者ってなんだよ…。」

具体的に、女子は何人以上で、男子は何人以下が理想なの？それ
通りにでき…。」

「女子は3人以上。これ大事。」

男子は、女子の数 - 1まで。少ない分には構わない。」

いつもの小林では、あり得ない頭の回転の速さでどんどん条件を
付けていく。

「部活の女子には、オレの家事能力がバレてるだろうから厳しいと
思う。」

だから、積極的に学部友達とかを連れてきてもらってくれ。

オレは基本的に守備範囲がオホーツク海ぐらい広いから心配する
な！

もちろん、可愛いに越したことはないが。

可愛い系かキレイ系かと聞かれたら、それは永遠のテーマとも言
っていい…。」

鷹谷は、意識的に小林の話を聞かないようにした。

（正直、2人でも集まればいい方だと思うぞ…。）

あいつの注文なんて絶対に応えられない。応える気もないが。

立場が代わってる今なら、少しは飲み会に来たがる子もいるとは
思うが…

最初に誰を誘うかが問題だな…。）

鷹谷はかつて経験したことがないほど、部活に行く気力が湧いてこなかった。

（体育館に着いてしまった…）

鷹谷は主将を務めるほど、真面目で責任感が強いので、どんなことでも一生懸命しようと努力するたちだ。今回は、完全にそれがアダとなっている。鷹谷の頭の良さなら、実際に誘わないでおいで、小林に無理だったと言う方法も気づいているはずなのに。

（よくよく考えれば、飲み会で情報収集というのは悪くない。

変なことを言ったとしても、酔ったからで済まされる。

小林に協力してやるついでに、オレは情報収集に当たるとしよう。

……それでも誘うのは気が重いな…）

「涼、どうしたの？入口の前で。」

新堂が声をかけてきた。

「新堂…」

（新堂に頼んでみようか…？

でも、新堂は真面目だからなあ…厳しいか。

前に誘われて、あっさり断ってたの見たことあるし…でも、もしかしたら…いや…）

新堂は鷹谷に見つめられて、頬が赤くなってくるのを自分でも感じた。

「涼？…その…え？」

新堂はいっぱいっばいで言葉にならない。

「…あつ、いや、ちょっとぼーっとしてただけなんだ。ごめん。」

鷹谷は結局、話を切り出すことが出来なかった。

（立場が代わったのが、オレにも影響が出ているのだろうか…）
鷹谷は自分の度胸の無さを他の何かのせいにしたらしい。

「涼先輩、ちわ～す！」

どうしたんですか？ いかにも、困ってます！ って顔してますよ。」
体育館に入って準備をしていると、相川^{あいかわゆい} 優衣が楽しそうに話しかけてきた。

「いや…まあ…ちょっとな。」

それより、なんか楽しそうだな？」

「誰が楽しそうって言いました？」

相川がすごく期待した目で鷹谷を見ている。

「誰って、あい…優衣が。」

鷹谷は、途中で相川の意図に気づいて言い直した。

「へへっ。なかなかいい気分です！」

この気分のよさに免じて、今なら涼先輩のために、たとえば火の中、水の中、

シャトルが飛び交う中でも助けてあげましょう！」

（シャトルが飛び交ってても、そんなに困らないと思うが…）

鷹谷は心の中で冷静にツツコミを入れながら、

「それはおと…頼もしいな。」

男らしいと言おうとして、今の状況には適さないことに気づいて言い直した。

（あぶない。こういう言葉もおそらく使うとマズいだろうな。

……せつかく、ここまでお膳立てしてくれたんだから相談してみようか…）

「実は…」

鷹谷は、小林が飲み会をしたがっていると、状況をオブラートに包んで伝えた。

「……それは、涼先輩も参加するってことですか？」

相川は、いきなり真剣な顔になって答えた。

（さすがに誤魔化したとはいえ、要は合コンだしな。やっぱり、厳しいか。

前の状況で自分が誘われたら行くかって言われたら、行かないかもしれないしな…）

鷹谷は、また別の人を誘わなくてはいけないことに気落ちしながら、

「まあ、オレも参加するけど…無理にこな…」

「行きます！絶対に行きます！ダメと言われても勝手に参加します！」

相川が興奮した様子で鷹谷の言葉をさえぎって答えた。

「メンバーはどうなってるんでしょうか！？」

もう、他の人も決まってるんですか？

新堂先輩も入ってますか？

店ですか？宅ですか？もしかして、涼先輩の家とかいう夢みtainな展開に…」

部活前の状況とデジャヴな展開に鷹谷は言葉を失う…

（あれ、優衣ってこんな子だっけ？

ここまで喰いつかれるとは…）

「あゝ、まだ全然決まってるなくて…」。

出来れば、優衣にもメンバー探すのとか手伝って欲しいなあとか言ってみたり。」

「女子なんか、いくらでも集まりますよ。

何人まで大丈夫なんですか？

女子の方は是非、私に任せて下さい！」

相川は、思惑があるのを隠しきれない感じで鷹谷に申し出た。

鷹谷は、相川に何か思惑があるのは気付いたが、見当もつかなかったのと、

鷹谷としては女子の方を任せられるのは願ってもない話だったのだ、

「じゃあ、女子の方をお願いしようかな。

たぶん、オレの家ですから、広さ的に女子は4人くらいが限界かなあ。

あとは、小林の希望だからテキストでいいんだけど…
女子は3人以上で部活の子以外もいて欲しいらしい。」

「ホントに涼先輩んちなんですか！いいんですか？

あたしんちとかでも全然いいですよ？

清先輩んちとかでもいいじゃないですか？そんな聖域を…」

相川は興奮したように聞いてくる。

（優衣の中で、オレンちは聖域なのか？

まあ、オレたちにとって、女子の部屋は確かに聖域か…。

しかし、やはりというか、小林は女子にああいう扱いを受けるのか。

まあ、その方がいいのかな…）

「じゃあ、女子の方はよろしく頼むわ。

日程は…こっちはいつでもいいから。そっちに任せるよ。」

「任されました！

日程もこっちこそ、いつでも大丈夫ですよ？

女子の方がそういうのは融通がきくもんじゃないですか。」

相川は、もう浮かれ気分で答えた。

「そ、そっか。

そろそろ部活始まるから、また部活の後でな。」

鷹谷は、そう答えてから、物思いにふけた。

（いくつかの事実が分かって、なかなか収穫あったな。

今の状況だと、やっぱり女子は合コンへの喰いつきがいいなあ。

女子はいくらでも集まるような話だったし、女子の家でする方が普通みたいだったな。

女子の方が融通もききやすいらしいな。
(

鷹谷だからこそ喰いつきの良さであったのは、全く気付いていなかった。

小林も言っていたが、この方面では鷹谷の頭のよさは活きないらしい…

第六話「幹事は大変だよ」

鷹谷はなんとか小林に頼まれていた合コンのセッティングが出来
そうで、ホッとしていた。しかし、これは自分の首を絞める行為以
外何物でもなかった。

「鷹谷、合コンは大丈夫そうか？」

小林は部活中に、気になってしょうがないらしく鷹谷に小声で状
況を聞いてきた。

「まあ…なんとか…おそらく。部活の後でいいだろ？」

鷹谷は新堂の目を気にしながら小声で答えた。

「まじか！！えっ？もう？

おっ、おまえ、合コンマスターだったのか！？」

パアアン！

鷹谷はどうかその声はかき消したくて小林のケツをラケットを
叩いた。

面がすっかり出来ているので、とてもいい音がした。

「小林、しっかり練習しろよ！」

鷹谷はわざとみんなに聞こえるように大きな声で注意した。
そうすることで、小林の発言を単なるおふざけとしたかったのだ。

「涼…部活の後でちょっと話があるから…。」
新堂がいつの間にか傍にいて、ぼそつと呟いた。

鷹谷は頬を一筋の嫌な汗がつたつていくのを感じた。
「……はい。」

（小林の方が明らかに問題なのに、なぜにオレだけ…。）
鷹谷は思うところもあったが、言い出す勇気はなかった。

「さっきは悪い！でも、もう少し教えてくれよ。
どんな感じになったんだ？」

小林は懲りずにまた小声で話しかけてきた。

鷹谷は無視したい気分だったが、小林がこのまま自分の周りをウロウロしていれば、また注意されるのは自分だと思い、
「…女子の方は優衣がどうにかしてくれることになった。
だから、全然分かん。」

「優衣？あゝ、相川のことか？
相川もおまえに落ちてるのかよ…。
マジ、テンション下がるな…」

「…この話なしにするか？」

「滅相もございません！鷹谷様には、いつも感謝してもした
りない状況でして…」

小林は、すごい変わり身の速さで鷹谷をヨイシヨする。

「あと、男子の方はどうするんだ？オレとおまえだけでいいの？」

「うーん、まあ、あっちの人数とか学年に合わせて、とーまとか後
輩を誘えばいいかな、と思ってる。それより、ほら、練習に集中し
る。」

「たしかに。了解」

小林はルンルン気分が端から見ても分かる、気持ち悪い感じで練
習に戻っていった。

まだ、練習中にも関わらず、周りを気にしながら、相川が小声で
鷹谷に話しかけてきた。

「涼先輩、部活前にクラスの友達にメールを送っておいたところ、
すでに2人から返信が来ているので、今日ならあたしを入れて3人
って感じです。明日以降でいいなら、5人は集められると思うん
です…」

「仕事が早いな…。うーん、小林も出来る限り早くって言ってたし、
今日にするかあ。」

それより、こっちは部活のメンバーになっちゃうだろうから、優
衣はつまらないと思うけど…。いいかな？」

鷹谷としては、さっさと終わらせてしまいたいという気持ちもあ
り、今日を選択した。

そして、もし、優衣が嫌がったら、クラスの冴えない友達を呼ぶことになると思うと、優衣に対して申し訳ない気持ちでいっぱいだった。

「分かりました、今日ですね。

あたしとしては、涼先輩んちという聖域に入れるというだけで、それはもう…言葉に表せない価値があるので心配しないで下さい。では、また集合時間とか決めたら教えて下さい。」

相川は笑顔で練習に戻っていった。

（優衣にとって、オレんちにどんな価値があるのか、非常に気になるところだが、とりあえず問題なさそうで良かった。あとは…とーまを誘って…小林に買い出しに行かせて…うん、なんとかかなりそうだ。）

鷹谷は目途が立ってホッとしていた。

練習後、

「あつ、とーま、今日の夜なんか予定ある？」

鷹谷はとーまこと今村透馬いまむら透馬に話しかけた。

「今日？んー、金曜かあ。すごく大事なことはないかなあ。見たいテレビがあるけど…」

「飲み会とかどうかなと思って。だから、テレビはたぶん見れるよ。

「

今村は少しびっくりした様子で、
「今日？リーリーにしては珍しく突発的な飲み会だね。まるで…
もしかして、女子も来るの？」

「あゝ、来るけど…。1人は優衣だから、とーまも分かるだろ？
あと、2人、優衣のクラスの友達が来ることになってる。」
鷹谷は、女子が来ることを当てられたことに驚きつつ答えた。

「それって…合コンってことお？？
ちよつと…準備が…。」
今村は合コンなら話は別らしく言葉を濁した。

これは、鷹谷にとって予想外だった。今までだったら、合コンであつても、『いいよ。お酒好きだし。』と言ってくれたであろうとーまが、合コンであることで断るとは…。とーまでダメなら、後輩たちも厳しいかもしれないと思い、鷹谷は焦った。

「今回は、小林がダダをこねて急遽設定したものだから、そんな本気の合コンじゃないんだ。だから、とーまも気軽な飲み会だと思つて参加してくれると嬉しいんだけど…。」

「んゝ、でも、着る服も用意してないし、部活の後すぐってことでしょ？時間が全然ないじゃん。」
どうやら今村は準備をする時間が少ないことを気にしているらしい。

「そこを何とか…。オレを助けると思つて参加してくれると嬉しい

な。今度、何か別の形でお礼するからさ。」

鷹谷はしつこく誘うのは主義ではなかったが、他にこれといった候補もないので、心の中では神にでも祈る気持ちだった。

「……リーリーにそこまで頼まれたら断れないね。普段は主将としてお世話になってるんだし、お礼とか気にしないで。それに、もとはきよの我儘なんだし。」

今村は妥協した形で承諾した。そして、鷹谷に無茶をさせている小林に対して少し憤りを覚えているようだ。

「ありがとー！また、そのうちメールで時間を伝えるわ！」

鷹谷は、素直に喜んで答えた。

（とーまがOKしてくれてよかった……！！まさか、女子より男子を誘う方が大変だとは……。

それに、とーま、小林に対して少し腹を立ててたな。めずらしい。

『きよらしい』って言って、笑って許しそうなのに……。）

工学部の鷹谷には、（前の状況の）女子同士の友達間の結束力などを理解するのは難しかった。そして、鷹谷は大事なことを忘れていたのだが……

（よし！後は、みんなにメールをして、小林には買い出しにも行かせなきゃな……。

……メール完了つと。じゃあ、帰って準備するかな。

ん？後ろに人の気配が…）

（般若がいる！！！）

新堂が腕組みをしながら、座ってメールを打っていた鷹谷を無言で見下ろしていた。

「……メールは終わったようね。」

練習が終わったら、すぐに言い訳に来るかと思っただら……。合コンマスターの名前は伊達じゃないようね。」

新堂が、鷹谷が今まで感じたことのない威圧感を放ちながら、話しかけてくる。

「いや…その…。あれは小林が勝手に」

「じゃあ、合コンはしないわけね？」

鷹谷の言葉を遮って新堂が言ってくる。

（プライバシーとか……存在しないんだろうなあ。）

鷹谷は一瞬答ええないという選択肢を思いついたが、さらに恐ろしいことになりそうで打ち消した。

「いや…その……します。」

「…誰と？まさか、相川とか言わないわよね？」

鷹谷はピンポイントを突かれたことに驚いたが、部活中の密会を見られたと思い、

「…言います。優衣と優衣のクラスの友達と…。」
と、素直に答えた。

新堂はすごくショックを受けた顔をした。

新堂としては、合コンに優衣が入っているのに、自分が入っていないこと、さらに実際に鷹谷が相川のことを優衣と呼んでるのを初めて聞いて、涙が出てきそうなほどショックだった。

そして、少し俯きながら、

「…主将ともあるうものが、部活の風紀を乱すようなマネはよくないんじゃない？」

と言ってから、鷹谷を睨みつけた。

鷹谷にしてみれば、そこまで言われる由縁はないのだが、新堂の凄みに、

「…合コンを中止しろってことか？」
と、聞くのが精一杯だった。

新堂は、自分を落ち着かせながら少し考えて、意地悪い顔で少し笑って、

「もう決まったことなんだろうし、そこまで言わないわ。
代わりに口止め料として、今度空いてる日に1日私に付き合ってくれない？」

まあ、荷物持ちみたいものよ。」
と、言った。

鷹谷にしてみれば、そんなことしなくてはいけない理由は全くなく、小林にやらせようと思い、口を開きかけたところで、新堂が少しソワソワしていることに気付いた。

鷹谷がなかなか返事をしないので、落ち着かない感じが簡単に見てとれるようになった。また、意地悪そうな顔も次第に懇願するような感じになってきた。

「…いいよ。今日が金曜だから…日曜はどう？」

「えっ…？いいよって…OKってこと？許可ってこと？了解ってこと？」

日曜？全然大丈夫！何が何でも大丈夫にするわ！」

新堂はテンパった様子で答えた。

「じゃあ、日曜に。楽しみにしてる。」

鷹谷は新堂に微笑みかけた。

新堂の顔が一瞬で真っ赤になり、

「わ…私も楽しみにしてる！」

とオウム返しで返事をした。

鷹谷は、新堂と別れてから思考を巡らせた。

（立場が代わっても、経験が残ってるせいでいろいろ不具合が生じてるんだろうな…。新堂も本質的な部分では、女の子らしい部分が残ってたしな。

しかし、新堂も合コンの話を聞いて自分もそういうことをしたくなったんだろうけど、素直に言い出せないあたりが可愛いな。でも、よく考えたらオレで良かったのか…？他の男子を紹介するか聞いてみようか…。

あっ！やべ！時間ないじゃん！急いで帰らなきゃ。）

鷹谷は時間の無さに気を取られて、新堂に他の男子を紹介することを忘れてしまったのだが、もし、紹介しようものなら命は無かっただろう…。

しかし…相変わらず、大事な部分は全く分かっていない鷹谷だった。

第七話「合コン 序盤戦」

鷹谷は、新堂との話が終わった後、またもや全力で自転車をこぎ、なんとかシャワーを浴びたり、来た人が座る場所を準備するのを予定の時間の前に終えることが出来た。

（……疲れた……。何か、精神的に部活がすごく疲れた……。明日以降の方が良かったかな……。でも、そうすると、新堂が後回しになっちゃっただろうから結果オーライなのかな。）

鷹谷がもう、ぐったりしながら考え事をしていると、チャイムが鳴った。

（この時間なら小林かな。買い出しで買ったつまみとかを皿に移したりしたいから、早く来いって言うてあったし。）

そう思いながら、戸を開けると小林と今村がいた。

「うす。買い出ししてきたぞ！これでオレの仕事は終わりだな。」
小林は勝手知ったる感じでズカズカと上がり込みテレビを見始めた。

「おじゃまします。遅れてくるとポジション取りとか難しそうだから早く来ちゃったあ。」

今村は、靴を揃えて中に入った。小林とは、大違いである。

（とーまは今日、いつもよりオシャレだな……。オレ、大して考えずに服選んじやったな。それより、小林の服装に違和感を感じなかったということ……いつも通りだな。まあ、比較的キレイなやつを

選んであるのか。)

鷹谷が周りの様子を把握しながら、買ってきてもらった酒を冷蔵庫にしまったりしていると、

「りーりー、手伝うよ。…あと、女子は迎えに行ったりしなくいいの?」

今村が気を利かせて鷹谷の手伝いに来た。

「サンキュー。女子の方は、なぜか優衣がオレんちを分かるらしく、連れてきてくれることになってる。あと…15分くらいかな。」

鷹谷は作業を中断せず、時計をちらつと見て答えた。

「まあ、優衣ちゃんは情報としては知ってるだろうねえ。」

それより、なんでこんな強い酒が混ざってるのお?僕こんなの飲めないよ。」

鷹谷としてみれば、

(『それより』ではなく、なぜ優衣が知っているのかの方が気になるのだが…)

強い酒が混ざっているのは、小林のセンスだからしょうがない。

それに、とーまは、酒に強い部類だと思うんだが…。確かに、前からカクテルとかを好んだが、勧められればあっさり強い酒も飲んでいたはずだが…。今は無茶して飲まなくなったのかもな。オレにしてみれば、女子は無理しないってイメージがあるから、それが入れ代わったと考えれば、つじつまが合うしな。

ということとは、今まで女子は余裕があっても断っていたのか…。)

鷹谷が今まで知らなかった事実には驚いていると、チャイムが鳴った。

「涼先輩、こんばんは！今日はお招きいただきありがとうございます！」「

相川が部活の後輩らしい挨拶をした。しかし、目はちよくちよく部屋の中の方へいつていて、早く鷹谷の部屋の中が見たいらしい。

「いらっしやい。こっちこそ急な日程で来てくれてありがとね。上がって。」

「「おじゃましまーす！」「

「「おじゃまします。」

二つの大きな声とワンテンポ遅れた声で、女子は上がり込んだ。

「えー、まず、急遽お集まり頂きありがとうございます。今日は、楽しく飲みながら、みんなと仲良く出来たらなと思います。それでは、杯を持って頂いて…では、楽しく飲みましょう！乾杯。」

鷹谷は、主将の経験はあっても、合コンは初めてなので、すごく堅い挨拶で乾杯の音頭をとった。

「くー、うま。最近、あんまり飲んでなかったしなあ。」

小林が一気に杯を乾かして、呟いた。

鷹谷は、それを見て、（こいつ彼女を作る気ないだろ…）と思いつつ、

「じゃあ、さっそく自己紹介といきますか。男性陣から…」

小林が一人空回りした自己紹介をし、今村と鷹谷がちよつと緊張した無難な自己紹介をして、全員と面識のある相川が、気を利かせて、みんなが馴染めるよう、関係を面白おかしく紹介した。

「はじめまして、優衣ちゃんと同じ教育学部2年の近藤志保です。おんな こんどうしほ

今日は、呼んでいただきありがとうございます。お酒が好きなので、基本的に飲み会は出席するので、飲み会があれば是非一声お願いします！他にも、好きなものはたくさんあるんですが…それは後々、話そうと思います。よろしくお願いします。」

相川が連れてきた2人のうちの1人は、慣れた感じで堂々と挨拶した。近藤は、女子の中では背が高めで、少し茶色に髪を染めていて、整った顔立ちをしている。恰好もオシャレで、長い脚を露出したセクシーな感じでまとめてある。

「えっと、はじめまして、私も優衣ちゃんと同じ教学部で、えっと、2年で…あつ、木村香織きむらかおりと言います。よろしくお願いします。えっと、…今日はお招きいただきありがとうございます。読書が好きです。…よろしく願います。」

もう1人の子は、こういうことに慣れていないらしく、つつかえつつかえで挨拶をした。木村は、150cm後半の相川より一回り小さく、ショートヘアーだが前髪が長めで、よく少し俯いているので、表情が分かりづらい。そして、相川や近藤みたいに活発というわけではない。

（優衣と近藤さんが仲がいいのは、性格的に考えても分かるけど、木村さんは…ちよつとよく分からんな。なにより、こういう飲み会には参加しなそうな雰囲気なの…）

それより、注意すべきは小林の行動か……。強い酒を女子に飲ませる、なんてことだけは無いようにしないと。小林の性格からすると、最初に近藤さんを狙うだろうけど、近藤さんは慣れてそうだし、たぶん大丈夫だろうから……。危険なのは、木村さんに標的変更したときだな……)

鷹谷が冷静に分析していると、

「志保ちゃんと香織ちゃんね。よろしく。リーリー、僕、冷蔵庫からおつまみ出してくるね。」

今村が気を利かせて台所へ向かった。

この行動によって、近藤と木村がいい男だな、と感心したような素振りを見せた。

そして、その素振りを見た小林が『これはマズイ!』と思ったのか、すばやく近藤の傍に酒を注ぎに行った。この移動に合わせて、なぜか(鷹谷にしてみれば)相川が鷹谷の横に移動し、男と女で別れて座っていたのが、必ず片方もしくは両方が異性という席配置になった。

ちなみに、鷹谷の横が小林なので、今村は近藤と木村に挟まれる形になった。

こんな感じで、所々で思惑が見え隠れする形で合コンはスタートした。

最初は穏やかに、全員に面識のある相川が積極的に話題を振って

いた。

「先輩たちは身長つて、どれくらいなんですか？清^{せい}先輩はけっこうデカいですよね？」

「まあな。180はあるな。185も、もしかしたらあるかも。健康診断とかメンドくさくてサボってるからなあ。」小林は、近藤の様子を横目に見ながら答えた。

「リーリーは170cm前半だったよね。僕は…160ちょいしかないんだ。ちよつとコンプレックスだなあ。」

今村が、ちよつと落ち込んだ感じで言うつと、

「そんなことないですよ。女子には、あんまり大きいと怖いとかいう子もいるし、あたしも今村さんくらいでも全然いいと思います。」
「そ、そうですよ。そんな気にしないでいいと思いますよ。」
すぐに、近藤と木村からフォローが入った。

「…ありがとお。それから、名字じゃなくて名前で呼んでくれていいからね。」

今村がニコツと笑って答えると、近藤の方は一瞬「グツときまし
た！」という表情をした。（ポジション的に小林には見えておらず、
今村は気付いていない。）

小林は大きい人が怖いと言われたことに、地味に1人ショックを受けていた。

相川が今度は、

「お酒はどうですか？あたしとカオリンは大したことないですけど、しほっちは強いですよ。」

「僕はあんまり…。カクテルとかサワーはまあまあ好きなんだけど、きよは酒豪って感じだけど、りーりーも赤くなってるのは見たことないなあ。」

「オレは、赤くならない性質たちなんだよ。それで、1年の時に飲まされて潰されたから、今ではまあまあ飲めるけど…小林の方が強いだろうな。」

と、鷹谷が振ってやると、

「まあな！だから、志保ちゃんもオレにはガンガン注いでいいぞ！」「いい感じの話題が回ってきて、小林が調子に乗り始めた。」

（これは…小林が潰れるパターンだぞ…。あいつ、けっこう酔うと1人で飲み続けるから、自爆するんだよ…。と、というか近藤さんが注いでるの強い酒じゃないか？）

近藤もその手のタイプには慣れてるらしく、小林を潰しにかかっているようにも見える。小林が自分で注がせたかもしれないが。

合コンは序盤から緩やかに中盤へと差し掛かっていく。

第八話「合コン 中盤戦」

合コンは中盤戦へと差し掛かっていた。

「そういえば、涼先輩と清先輩ってすごく仲いいのに、なんで名字で呼び合っんですかあ？すごく気になってたんですよえ。」
相川が少し酔った感じで鷹谷に話かけてくる。

「ああ、それは、大した意味はなくて、小林が名前で呼ばれるのは、かわいい女の子からがいいとかいう理由で嫌がったからなんだ。まあ、最初から名前で呼んでれば、あいつも訂正はしないんだけど、オレは最初、名字で呼んでたから、そのままズルズルいつて今に至るんだ。」

と、鷹谷が説明すると、

「まあ、そこが『かわいい女の子』じゃなくて、『好きな女の子』とかだったら、意外に男の子らしいって思うところなんだけど…。まあ、清先輩らしいかあ。」

と、相川が呟いた。

（男の子らしい…のか？ってことは、一途であるのは男性の方が割合が高いのか？でも、一般的にそう思われてても、都市伝説みたいなもんで、実際は同じくらいっていう可能性が高い気がするな。）

鷹谷は、予定通り情報収集に余念がない。

鷹谷と相川、小林と近藤、今村と木村といったペアで話こんで少しすると、

「鷹谷、もしかして、もう酒ないのか？」

小林が真つ赤な顔で聞いてきた。

「まだ、冷蔵庫にあるけど…」

その言葉を聞くと、小林はおぼつかない足取りで酒を取りに行った。

鷹谷が、周りを見回すと、小林だけが異常に酔っている。女子3人はちょうどいい酔い具合で、鷹谷と今村はまだ余裕がある。小林と一緒に飲んでいる近藤が、大して酔っていないのは強いのもあるのだろうが、小林を煽^{おた}てて上手く潰そうとしているのが大きそうだ。

そんなことを考えながら、周りを見てみると、相川が、

「…しほっち、透馬先輩を狙ってますね。そのために、早く清先輩を潰そうって意図がありありしてますね。しほっち飲ますの上手いからなあ…。透馬先輩は…今日はお持ち帰りかもしれないですね。」

鷹谷は最後の一言にすぐくびくくりして大声をあげそうだったが、すんでのところで押しとどめた。

「それは…マズくないか？」

鷹谷が相川に肯定的な返答を期待して聞くと、

「そうですかあ？透馬先輩も最後は自分の判断で行動しますよ。…
きつと。」

それより、全然飲んでくないですかあ？」

鷹谷は『きつと』の前に少し間が空いたのが、不安になったが、
追及はさせて貰えそうになかった。…相川と近藤の間で不可侵条約
が結ばれていたのは、鷹谷が知る由もない。

「志保ちゃん、ぜんぜん飲んでないんじゃない？」

小林の声が大きくなってきて、みんな（主に鷹谷と今村と木村だ
が）心配になって注目している。

「そうかしら？じゃあ、一緒に飲みましょ？」

近藤が明らかに釣り合わない量をコップに注いで、『乾杯』した。

小林の方に注がれた酒は強いものらしく、小林は一気に飲みきれ
なかった。

「あら、『乾杯』は杯を乾かすって書くのよ？乾いてないじゃない。
私はもう全部飲んじゃったわよ？」

小林は『そうだな…』と、言うてから苦しそうに飲み干して、
床に突っ伏した。

（これは……予想外だな。小林をどうしようか…）
鷹谷が困っていると、

「きよ…どうしようか？」

今村が同じく困ったように鷹谷に聞いてきた。

「もう、小林は限界だからトイレは…みんなが困るから、風呂場に運ぶか…。」

鷹谷と今村で、脱力した重い小林を風呂場へ放り込んだ。

……この時期なら風邪もひかないだろう…。と、思いつつバスタオルで体を包み、頭の下にもタオルをひいてあげた。

そして、一仕事終えた感じで鷹谷と今村が部屋に戻ると、女子は作戦会議中だったらしく、頭をくつつけて話し合っていたのを、パツと離れた。

「あゝ、小林は大丈夫だから気にしないで。あいつは放っておいても大丈夫なんだけど、今日は時間も遅いし、解散にする？」

部活の後で始めたため、開始が遅く、そんなに時間はたっていないが終電で帰るなら、そろそろいい時間だと思い、鷹谷は提案した。

「あつ、大丈夫です！夜遅くなると思って、みんな自転車であつたの
で。」

それより座って下さい。みなでゲームでもしませんか？」
相川がさっきまでの酔った感じもなく、ハッキリと言った。

鷹谷と今村は、完全に女子に主導権を取られ、席も、今村は変わらず近藤と木村に挟まれ、鷹谷は相川と木村に挟まれる形で座った（座らされた）。

「では、定番ではありますが…王様ゲーム!!」

相川が場を仕切り、近藤がそれに乗る形で合コンらしいテンションになってきた。

準備も万端らしく、クジが5本用意されていた。

鷹谷と今村が不安な気持ちになるなか、王様ゲームは始まった。

「やったー。王様〜！」

最初だし軽く…3番がそのお酒一気飲みで。」
最初の王様は近藤で、慣れた感じで指令を出した。

「3番は…僕だね。…飲みます。」

今村は、自分が3番のことを何回も確認しつつ、まだ簡単なので良かった、といった感じで軽く飲み干した。

相川と近藤から『おお〜』と合いの手が入った。

「あつ、私が王様だ。」

えっ…どうしよう…。じゃ、じゃあ、1番がそのお酒を飲んで下さい。」

次の王様は、木村で何も思いつかず、同じ指令を出したが…

「えゝ、同じのは面白くないよお。ちょっとは変えようよお。」
相川がハードルを上げた。

「えっ！…じゃあ、2番が1番にお酒を飲ませて下さい。」

「やった！2番。」

木村が指令を変えると、近藤が喜んで立ち上がった。

「えっと…1番です。」

可哀想なことに、またもや今村が当たった。

近藤は、いいこと思いついた！という顔をして、強い酒が残っているビンを片手に今村の前に向き合って立った。

「そのお酒じゃない…よね？」

今村が肉食動物を前にした草食動物のように言つと、

「指令を変更したときに、『その』っていう指定が抜けたわ。お酒を飲ませるとしか言われてないんだから、これでも問題ないですよね、透馬さん？」

ニコリと近藤はかわいく笑ったが、今村の表情には恐怖以外のものは存在しなかった。

「じゃあ、選ばせてあげます。これを飲まされるか…もとのお酒をあたしに口移しで飲まされるか。お勧めは断然、後者ですね。飲む量も一口で済みますしね。」

近藤はニコニコしながら、今村との距離を詰めていく。

近藤が今村に息がかかるくらいの距離まで近づいたところで、
「…そっちのビンで…お願いします。」

今村が俯きながら答えた。

近藤は、『ちえ、残念！』という表情をしてから、左手を後ろから回して、顎を持ち上げ、ほとんど抱きつくような体勢でビンを傾けた。

今村は、身を振るような動作をしたが、酒を零すわけにもいかず、そのままの体勢でなんとか飲みきった。

そして、今村はずり落ちるように座り込んだ。

（これは…とーまがピンチだな…。でも、助けようにも多勢に無勢で…。）

鷹谷が、考え事をしていると背中から体重がかかってきて、

「涼せんぱい、あたし、ちょっと酔ってきちゃったみたいですよ。
…少し寄りかかってもいいですかあ？」

相川が許可を得る前に寄りかかるというより、半ば抱きつくみたいに鷹谷に近づいた。

鷹谷の首には相川の吐息がかかり、鷹谷は、背中 of 感触を意識しないようにするのに精一杯で、思考が思ったように回らなかった。

合コンはまだまだこれから…

第九話「合コン 終盤戦」

合コンは鷹谷の予定とはまったく異なった状況になっていた。

鷹谷は、もつと穏やかに情報収集する予定だったのだ。

鷹谷と今村は、ある種のピンチを迎えることとなる…

今村が大量に強い酒を飲まれたため、潰れてはいないが王様ゲームは少し休憩になった。近藤は、べったりくつきながら介抱している。端から見ると、肉食動物が弱った草食動物を前に舌舐めずりしているようにしか見えないが…

鷹谷は、くつついている相川を引き剥がすことを最初から無理だと悟ったらしく、意識を違う方向に向けるため木村香織きむらかおりに話しかけた。

「木村さんは、どうして今日の飲み会に参加したの？なんか…あんまり、こういう場は得意そうじゃないのに。」

「あつ…それは…志保ちゃんに誘われて、最初は断ったんですけど…まあ、1回くらいいいかなと思って。」

（まあ、予想通り無理やり誘われたのか…。でも、今回は時間がなかったから、結構あつさり承諾した可能性も高いな。…近藤さんがかなり強引に誘った可能性もあるが…。）

「そうなんだ。でも、ごめんね。小林は潰れちゃうしで……。……あんまり楽しくないでしょ？」

鷹谷は、後半は小声で聞いた。

「そんなことないです！…透馬さんのお話とか面白かったですし…。」

木村は、チラツと今村の方に目を向けてから俯いて答えた。

（そっか、木村さんも…。出来れば、とーまのためにも、どうにかしてあげたいな…。でも…）

鷹谷は、肩に顎を乗せて気持ち良さそう（夢心地な）相川に意識を戻し、この混沌とした状況が無難に収める方法が思いつく気がしなかった。

「それでは、透馬先輩も復活したので、王様ゲーム再開します！」
相川が言つと、近藤はノリノリで場を盛り上げ、鷹谷と今村は戦々恐々とした様子でいる。

しかし、さすがに今村が何回も連続で指名されるということもなく、上手い具合にみんなお酒を飲まされ、相川と木村はかなり酔っ払い、その他の酒に強いメンツも赤くなってきた。

「あつ！あたしがーおおさまだあー」。

じゃあねえ…2番が…4番のほっぺにい…キスで！」
相川が王様になり、指令を出した。

鷹谷が、『指令の難易度が上がってきたな…』と、思っていると、
今村が、

「…僕が2番…」

と言い、泣きそうな顔で周りを見渡している。

鷹谷は、可哀想に、と思って見てみると、4番が名乗り出ないことに気付いた。まさかと思ってみると、鷹谷が4番だった。今まで簡単な指令しか当たっていなかったので、なんとなく自分ではない気がしていたのだ。

「あ…オレ4番…」

今村は、近藤でなくてホツとしたのと、酔っているのが合わさって、嬉しそくに鷹谷に近づいてほっぺに軽く口づけた。相川と近藤は、『きゃー』とはやし立て、次は自分が…みたいな顔をしている。木村も声こそ出さなかったが、酔いとは別に頬を染め、羨ましそくに鷹谷を見ている。

だんだん指令が過激になっていき、（主に相川と近藤によるものだが…）中には『1番が2番のお尻を3回なでる』とか（近藤が木村のお尻をいやらしくなで回した）、『1番と4番が1番上の服を交換する』とか（今村と木村が交換し、今村はよく似合っていた）

などがあつた。

とても盛り上がっていたが、鷹谷としては、これ以上指令がハードになるとマズいと思っていると…。

「あたしが王様！…もう考えるの疲れたなあ…。じゃあ、1番が2番の好きな場所にキスでいいやあ。2番は目を閉じて待つてることね！」

強力なクジ運でまた相川が王様を引き、指令を出した。

しかし、1番が木村で、2番が今村（こつちもある意味すごいクジ運）だったので、他の3人は無難にほっぺとかにして、終わるだろうと思っていた。

ここで、みんなが予想外だったのが、木村の酔いの具合である。立場が代わっても、経験はそのままなので、今まで全然お酒を飲まなかった木村が、今日は限界も分らず飲み続けていたので、もう完全に出来あがっていたのだ。

「…キスですか？…はい、分かりました。透馬さん…目、つぶってますか？」

木村は、フラフラと今村に近づき、そして、今村のくちびるに口づけた。

「「ええー！！！」」

相川と近藤の絶叫が響いた。
今村の顔は、もう真っ赤つかで、なんと言っているかわからない様子だった。

状況を理解出来ない木村は、
「え…ダメでしたか？透馬さん」
と、泣きそうな顔で今村を見つめて問いかける。

「そんなことは全然！どつちかという嬉しかったっていうか…」
今村は慌てて弁解したため、本音がダダ漏れなのだが、それに対して木村は、

「良かった…。」
と、嬉しそうにほほ笑んだ。

それを見た今村は見とれてしまって、何も言えなくなってしまった。

この状況を見て、面白くないのは当然、近藤である。そのため、近藤はすばやく次の行動に打って出た。

「あゝ、なんか、あたし酔ってきちゃったかもあゝ。」
近藤は、自分が酔っていることをアピールし始めた。

鷹谷は、この様子を見て思った。

（近藤さんはもしかして、酔っていることを理由にとーまに送らせて、そのまま……。マズい、止めなくては！でも、どうしよう……）

鷹谷は、近藤の意図に気付きつつ、自分は家主であるためどうしようもなく、諦めかけていた。

「1人で帰れるか自信ないなあ……。誰か送ってくれないかなあ……。とうとう」

「志保ちゃん、オレが送ります！」

今まで、完全に存在を忘れられていた小林がいつの間にか部屋にいて言った。

「えっ！？……そんな……申し訳ないですし、小林さんもまだ調子良くないんじゃない？……」

近藤は予想外の小林の乱入に取り乱しながら答えた。

「大丈夫！もう、完全に復活したから。それに、ちょうどもう帰ろうかと思っていたところだし。」

小林はニコニコしながら答えた。

小林は部活の飲み会でも潰れるほど飲むことはよくあるので、復活も早いのだ。

鷹谷は心の中で、小林の空気の読めない行動を初めて褒め称えた。

こうして小林が近藤を送っていくことになったので、そのまま合

コン自体がお開きとなり、今村が相川と木村を送っていくことになった。鷹谷はみんなを送り出してから、部屋を少し片づけ、ベッドに腰をかけた。

（…疲れた。すごく疲れた。もう合コンなんて当分したくない…。一生しなくてもいい。大して情報収集も出来なかったし、王様ゲームはよろしくないという記憶しか思い出せない。…そういえば、日曜は新堂と出かけるんだった。どこに行くかとかはオレが考えるのか？…今日はもう疲れた。とりあえず、寝よう…）

鷹谷は、珍しくシャワーも浴びずにそのままベットに横になった。そして、すぐに眠りに落ちた。

こうして、精神的ダメージを受けるだけで、大してメリットのなかった合コンは終了した。鷹谷は恋愛面に疎いので当分知ることはないのだが、今村と木村は……（この後を番外編として書くかはまだ未定です。今のところ、読む人のご想像にお任せしようかと…）

鷹谷の苦難に終わりはまだ見えない。

第十話「何もない休日のはずが」

「んっ……もう、明るいな…何時だ？」

鷹谷は目が覚めて、すっかり明るいことに寝すぎたと思いつつ、時間を確認した。

「…10時か。そんなに、時間がたってなくて良かった…」。

まあ、今日と明日は体育館の都合で部活ないし、問題ないんだけどね。」

誰に言つとでもなく呟いて、朝の支度を始めた。

鷹谷は、シャワーを浴びてながら、頭の中を整理していた。

（正直、合コンはいいことなかったな…。情報も…入ってきたのかもしれないが、ほとんど覚えていない。女性に対する恐怖感が異常に残っているだけだ…）。

でも、少し思ったのは、もともと男子っぽい女子や女子っぽい男子がいたから、小林の行動にもそこまで驚いてなかった…気がする。そして、木村さんが合コンに参加したように、立場が代わったことで意識の変化が生まれている…気がする。

『今までだったら絶対ヤダ』と思ってたのが、『まあ、いいか』になったりするほどの変化が…。…まあ、だから、オレにどう影響があるかって言われたら、よく分からんが。）

結局、大して情報が集まっていないことを再確認して、少し落ち込んだ。

「昨日は精神的に疲れたからな…。今日は、のんびりしたいな。」

鷹谷はいつもなら自炊するところだが、今日は学食で済ますことにした。

そして、朝食兼昼食の学食の帰りに鷹谷は、近道に細い路地を通っていた。

「ほら、ぐずぐずしてないで早く買つてよ。」

「そうそう、のど乾いちゃった。」

「あたし、コーラね。」

「なんで私が払うの？ だいたいそんなお金ないし。」

「ジュース3本買うお金もないわけ？ そんなことないでしょ？」

「…そんなお金ってというのは、そういう意味じゃなくて…。」

どうやら3人の女の子が1人の女の子をたかっているようだ。鷹谷は今までそういう場面に出くわしたことがなかったので、

（こういうのって本当にあるんだあ。女子のいじめって怖いなあ。もっと、陰険なものを想像してたけど、直接的なものもあるんだ…。って、そんなことよりどうしよう…。事情も分からないのに、助けるのはいいんだろうか？）

鷹谷は、悩んでいるが、一本道なので、すでに鷹谷の姿は女子たちに見られている。ここで、引き返せば、逃げたことが丸分かりだ。

「あゝもう、おまえ、まだ口答えするの？ 痛い目見ないと分かんない

いわけ？」

鷹谷が悩んでいる間に状況は悪化していく。すでに状況は一触即発である。

鷹谷は、『今日はのんびりしたかった…』と思いながら、相手が女子だから大丈夫だろうという理由で止めに入った。

「状況はよく分かんないけど、そういうのは良くないと思うよ。」

3人組の方はびっくりしてから、リーダー格が睨みつけながら言うてきた。

「男が生意気に口出すなよ…。」

鷹谷は、なんとか穏便に済みたいな…と思いつつ、困った顔をしていた。

「引かないんだ…。」

リーダー格はぼそつと言って、殴りかかってきた。

鷹谷は突然のことに驚きはしたが、どこかで冷静な自分がいた。

（…そんなに力があるわけでもないだろうし、よく見れば…）

パシン！

鷹谷は、顔の前で片手で女子のこぶしを受け止めた。そして、すかさず手を捻った。

「いたい！！無理、むりゝ、離して！」

リーダー格の子はすごく痛がって、助けを求めた。

鷹谷はパツと手を離すと、リーダー格の子は涙目で3人一緒に逃げて行った。

（明らかに、喧嘩には慣れてなかったな。すごい殴るの遅かったし。いじめは昔からやってたんだろうけど、立場が代わるまで暴力はしたことなさそうだったな。）

鷹谷は、バドミントンをしていて、動体視力も反射神経も運動をしていない女子とは比べ物にならないのである。

「あの…ありがとうございました。バドミントン部の方ですよね？」
助けられた女の子が言ってきた。

「そうだけど…なんで知ってるの？」

鷹谷は、バドミントン部であることを当てられ、驚いてすぐに聞き返した。

「私、同じ大学なんです。今、2年なんですけど、高校までバドミントンやってて、大学でも続けたいなと思って、最初、見学に行っただけです。その時、すごくキレイなプレーをする人だなと思って…。私、いいプレーをする人を見ると、一瞬でその人を覚えちゃうんです。」

鷹谷は、全然いじめられそうなタイプじゃないことに驚きながら聞いた。

「それは分かるな。大会でも、やっぱりシード選手はすぐ目がいつちやうよね。それより、なんであんな状況になつてたの？」

「何となく近道しようかなと思つて通つたら、たむろしてて…。すぐにかまれたわけじゃないんですけど、私ああいうの嫌いで、表情に出てたらしくて。ジューズで勘弁してやるみたいな話になつて、助けて貰うところ…。」

鷹谷は状況を理解し、ずっと続いているいじめとかではないことに安心した。そして、最初の部活の話を思い出した。

「あゝ…名前教えて貰えるかな。それと、どうして部活に入らなかつたの？一瞬で上手い人を見分けたり出来るには、それなりに経験が必要だし、小さいときからやつてたんでしょ？」

「あつ！藤堂凛ふじどう りんです。バドミントンは小3からやつてたんですが…入らなかつたのは、個人的な理由です。」

藤堂は、ハキハキと答える。

「オレは鷹谷涼たけやっていうんだ。3年で、バドミントン部で男子主将をしてるんだ。良かったら、相談に乗るよ。」

鷹谷は、いつも人材不足な女子を思い浮かべ、勧誘した。

「お気持ちはありがたいですが、個人的なことなので…。
ありがとうございます。失礼します。」

藤堂は、鷹谷がさらになにか言う前に帰ろうとした。

「待つて！部活には入らなくてもいいから！オレとバドミントンしない？」

鷹谷は、帰られそうになって、なんとなく、『このまま帰しちゃダメだ！』と直感的に感じ、言葉も吟味しないまま呼びとめた。

藤堂は立ち止まり、ふつと笑い、

「…新手の逆ナンですか？」

鷹谷は『逆ナン』の単語にも引つかかったが、それ以上に自分の言ったことを思い出して、テンパリながら言った。

「いや！そうじゃなくて、その…事情があるなら、部活には無理に誘わないけど、たまにはバドミントンしたくなるんじゃないかなって思って。部活に入ってるおかげで、多少体育館の使えるときとも分かるし…。…やっぱ、おせっかいだったかな？」

藤堂は少し考えてから、

「…おせっかいですね。…でも、たまには打ちたくなります。お互いが暇なときでいいので良かったらお願いします。」

と言って、深く頭を下げた。

鷹谷は、あまりに下手に出られたので驚いて、

「そこまですなくても！話を持ちかけたのはこっちだし。…じゃあ、よろしくね。」

と、微笑みかけると、そこには一筋涙を流した跡のある藤堂の顔があった。

しかし、さきほど、おせっかいと言われた鷹谷はそのことをスルーし、連絡先を交換して藤堂と別れ、帰途に着いた。

（…最後の涙は何だったのだろうか…。そして、なぜオレは初対面の人にあんなことを！！恥ずかしい。…バドミントンの話で共感できる部分が多かったからかな？それとも、最初に自分のプレーを褒められたからか…それはないと思うが。

とりあえず、大して心休まらない休日になってしまったな。…あゝ、新堂に明日の集合時間とかメールしてねえゝ。怒られつかも…。）

鷹谷はのちのち、今日、直感を信じて行動して良かったと心から思うのだが、それはまだ先の話である。そして、鷹谷の心休まる日は一体いつか来るのだろうか…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8069o/>

男と女の立場が入れ代わった世界で

2011年11月12日15時34分発行